

高瀬神社社報

越中一宮

越中一宮
高瀬神社
天正十四年八月建立之

第46号

平成 27 年 7 月 1 日

越中高瀬神社
一宮

<http://www.takase.or.jp/>

撮影：南部スタジオ

社頭講話

「想い」

宮司 藤井秀弘

四月、五月は野山の草木が緑に染まり、きれいな花を咲かせます。それも束の間、いつの間にか路端に散り、川面に流れ行くその様を歌人たちは、「花笈」と詠んで、行く春を惜しみつつも、新緑の生命力に喝采をおくりました。また、この良き季節にまめまめしく活動する小鳥や小さな虫たちの生命力にも声援をおくりたくなるものです。

春から初夏にかけての季節は動植物が生き生きと活動する時季であり、私にとって一番心を癒すことのできる大好きな季節です。

新たな生命を生み、育てるための活動、それは命がけで行わ

れます。その結果、生命が引き継がれて行くことになり、子孫繁栄となります。

神道に「中今」という言葉があつて、過去と未来の中間、すなわち現在のことを指しています。今現在生きている私たちが伝統や文化、ひいては生命の継承を真剣に行わないと日本人のアイデンティティが失われ、伝統文化が廃れ、国勢衰退となつてしまいます。先ほどの花や草木、また小鳥や虫などの動植物は一つ一つの行動が命がけで、日々種族の繁栄と継承に努力し、頑張っています。その姿に人は見習うことが多くあると思います。

近頃の日本人は自分に与えら

れた使命を達成するという、責任を全うする気概が損なわれているように感じます。

今年は大東亜戦争が終結して七十年の年を迎えました。当時二十代だった青年は九十歳となりました。かく言う私も当時は十五歳の中学生でした。たくさんの若者が命を懸けて戦地へ赴き戦火に倒れ、国内では多くの老若男女が戦禍に巻き込まれ、亡くなりました。自分に与えられた生命を次世代に継承したいと願つても叶えられなかった厳しい時代でした。

個人として「中今」に生きられなかった英霊・戦没者の精神を残された国民が受け継ぎ、戦後復興に力を注ぎました。その結果、日本は経済発展を遂げ、世界の経済大国になることができました。経済活動に走りすぎて失ったものもありましたが、国民全体として「中今」の精神で

日本らしさを継承してきました。

現在の日本人に「中今に生きる」という使命感を持つて生活している人は、どのくらいいるのでしょうか。

価値観の変化はやむを得ないことかもしれません。個人主義が度を超して、国民の心がバラバラになっています。また、日本伝統の麗しい精神や文化が失われそうになっています。

英霊は身をもって日本国、また、日本人の在り方を教えて下さったのに、それを学ぼうとか、知ろうとか、しなくなりました。これからも我が国が発展し、世界に認められるために大切にしなければならぬことがたくさんあるのに。

終戦七十年という節目の年に、「中今」に生きる意味を見直してほしいと思います。これからの日本の行く末を明るくものにするために。

祭事暦

春季祭(大祭)

桜の花が満開となった四月十日午前十時より「春季祭」が行われ、約二十名の参列者と春の訪れを喜び、今年一年の平安と豊作を祈りました。

祭儀では宮司祝詞奏上の後、巫女が神楽「浦安の舞」を奉納。続いて「越中一宮高瀬神社奉賛歌」を全員で奉唱しました。

感謝状贈呈(高瀬奉納者) 氏子

藤井孝行殿



祈年穀祭(大祭)

六月十日午前十時より「祈年穀祭」が斎行されました。

この祈年穀祭は天武天皇の御代、病虫害による農作物への大きな被害が度々起こった為、勅使(天皇の意思を伝達するため)に派遣される特使(遣わされ、事態の収束と豊作を祈願された事から始まりました)。

御神前で採火した御神火が灯され、宮司が祝詞を奏上。大前に砺波地区農業協同組合協議会からの幣帛が供えられ、参向使を務める、いなば農業協同組合

齊藤一友常務理事による祭文が奏上されました。

引き続き、御神火を境内大鳥居前に据えられた「篝火台」に移し、宮司に合わせて拝礼しました。「誘蛾灯」として用いられた往時に思いをはせ、災いなく豊かな秋の実りが訪れるよう祈念しました。

翌十一日には御神火を伴って、神輿が砺波広域圏四農協の本所を渡御しました。組合長以下



神輿巡渡御行程

なんと農業協同組合



福光農業協同組合



いなば農業協同組合



となみ野農業協同組合



下職員総出で神輿を迎え、御神火を蠟燭に分火し、お祈りしました。



献穀田だより

「御田植祭」 斎行

奉耕者 安田外喜男氏

井波地域中核農業士協議会（柴田嘉久会長）

五月二十四日、南砺市高瀬（井波）の齋田で「御田植祭」が斎行されました。

本年は当神社鳥居前の



齋田が献穀田となり、大勢の住民・家族が見守る中、早乙女姿の女子中学生五



早乙女奉仕者

- 中川日向子さん（中学生）
- 前川 玲奈さん（中学生）
- 福井 彩夕さん（中学生）
- 長井 暖果さん（中学生）
- 澤田 怜奈さん（中学生）

名が、安田外喜男氏より「コシヒカリ」の苗を受け取り、心を込め丁寧に植えました。

九月中旬には「抜穂祭」を行い、収穫した稲は「懸税」として伊勢の神宮に奉納されます。



献穀田 御田植祭

昔の風景

穀物の豊かな実りを祈願する神聖な行事は、稲作の始まりとともに行われてきました。

今回は昭和十二年六月一日、当社社の献穀田で斎行された「御田植祭」の様子をご紹介します。



御田植の様子

祭典終了後の列立



健康長寿祈願祭

四月八日午前十時より、高瀬地区老人クラブ連合会（大和秀夫会長）の会員約六十名参列の下、「健康長寿祈願祭」が斎行されました。

祭典では春らしい神楽舞「胡蝶の舞」が奉奏され、再びめぐり来た春と会員の健康長寿を祝いました。

当日は清掃奉仕も行われ、清々しく境内が掃き清められました。



観月祭
大土地神楽奉納

本年七月七日に開催される「くにたまの会総会」を記念して、島根県の伝統芸能「大土地神楽」を奉納します。

日時 九月二十七日
(日・仲秋の名月)

午前十時から正午まで

くにたまの会記念奉納
午後五時から午後七時まで

観月祭奉納

※奉納内容は午前・午後共に
同じです

場所 高瀬神社御本殿

名称 大土地神楽

(国指定重要無形民俗文化財)

保持者 大土地神楽保存会神楽方

所在地 島根県出雲市大社町杵築西

会長 桐山和弘

会員数 三十一名

(平成二十七年四月一日現在)

発足 約三百年前

概要 大土地神楽は、古くから大土地荒神社の神主によって



舞われていましたが、寛政十年(二七九八年)の「袴家順番帳」等の記録によると、宝暦年間(二七六〇年前後)には既に入素人神楽が舞われ、その頃から子ども舞を奉納していることが確認でき、三百年以上途絶えることなく民衆によって受け継がれています。平成十七年二月に

は国の「重要無形民俗文化財」に指定されており、

その舞い振りや奏楽は、毎年十月の大土地荒神社例祭で、昔ながらの形で受け継がれており、出雲大社の門前町として、盛んだった芝居興行による影響もあつてか、とかく観衆を意識し、楽しませる所作・演出が随所に見受けられます。また能舞の要素が多分に含まれた舞いも残っており、腰に「まくら」を背負った上に衣装を着けるといった、独特な容姿となっております。

現在の活動としては、大土地荒神社例祭はもとより、出雲大



社例祭への奉納神楽、県内外での公演もしています。平成四年にアメリカ・ポートランドやエレンズバーク、平成五年には、フランスの「パリ日本文化祭」やイギリス・ロンドンでの公演といった好機に恵まれ、国外でも神楽を披露することが出来ました。また、国譲り神話の舞台で「稲佐の浜夕刻篝火舞」を自主開催する等、神楽の素晴らしさを一人でも多くの方に知っていただくよう公演活動も行なっております。



高瀬の英霊（齋藤清志命、南砺市三清西出身）

（魚岸一弥記）

前号の「碑いづみに見える高瀬の英霊」の記事において齋藤清志命についてご紹介致しました。此度、齋藤清志命の甥、齋藤侃夫氏にお話を伺う機会を得ました。今回は、前号では触れられなかった逸話も交えてご紹介したいと思います。

○出会い

齋藤侃夫氏は、碑の建立に尽力された齋藤成正氏（齋藤清志命の兄）の御子息で幼少の頃、齋藤清志命が帰省された折、お会いしたことがあります。

子供好きであった齋藤清志命



齋藤清志命

襟元の階級章はご遺族の手によって帝国陸軍「少佐」の階級章に修正されている。

は身に付けていた軍刀を侃夫氏につけて、「格好良い、格好良い」と、囁してくれたことが印象に残っているようで、短い出会いましたが好きな叔父さんの一人だったそうです。

また、宿願であった航空兵になられた齋藤清志命は、高瀬村近辺を飛行する機会があると、そのことを事前に実家に連絡し、ご家族に外に出るように促されました。当日、ご家族が齋藤清志命の乗る飛行機を一目見ようと外で待っていると、齋藤清志命が搭乗された飛行機が、実家上空を二回にわたり旋回さ

れご家族に合図を送られたそうです。

○軍人としての決意

齋藤清志命は、非常に真面目な性格で一度決めたことは最後まで貫き通すという信念を持っておられました。その為、軍に志願した以上国家の為に全身全霊で尽くす強い決意を常に持つておられたそうです。出征する際も、その決意は固く、戦地に赴かれる折には蠟燭と線香、また棺桶も準備されて、自身の母親には「戦死します」と伝えて戦地に向われたそうです。昭和十五年四月に発刊の『高瀬村報』「戦線便り」の記事にも、村民へ向け左記の意気込みを記されています。

齋藤清志

拝啓（略）此の上は益々皆々様の御恩に感謝し御期待に副ひ奉り立派なる○○将校として御役に立ち度き覚悟に御座候○○

科は其の特性に鑑みても御解りの如く毎日毎日死を覚悟仕り候へて演習に従事不日のために備へ居り候（略）

※文章中の○○という表現は、軍隊の状況を知られないようにする為の当時の処置

この表現は、決して大げさな表現ではなく自身の心の俣に書かれたといえます。

○ご家族

齋藤清志命は、ご結婚されており夫婦仲は円満だったそうです。御息女もいらっしゃいました。奥様の竹子夫人は高瀬神社で巫女として奉仕されていた時期もあり、また高瀬小学校で書道も教えておられました。前号の碑の本文は、兄成正氏が構成されたのですが、揮毫は竹子夫人がされたそうです。

○階級にフタマ

前号の執筆の際、碑には「大

尉」から戦死後、「二階級特進」されている為、本来は中佐とされるはずですが、碑には少佐とされている点が気掛かりでした。その件について質問したところ、戦死後、齋藤清志命の村葬の際、侃夫氏はその時のことを特に覚えて居られ、「遺髪・遺爪が納められた白木の箱に「佐」の字があつたが、資料がなく佐官の何れかわからなかつた」ようです。その為、物事を大げさに言うことを嫌がられた成正氏は佐官で一番階級の低い少佐ということと表記されたそうです。

◎**新聞報道**

前号、碑に「昭和二十年）二月十五日夜半 突如敵艦船群攻撃せよとの命下り 十七日午前十一時本庄飛行場離陸浜松を経て一路硫黄島に向け出撃九機編隊の指揮をとる この日敵上空まれなる悪天候の為攻撃不能により全機引返したるも 君は単機にて極限の低空搜索を敢行し以て敵大艦隊を補足攻撃 大

型巡洋艦一隻 艦種不詳一隻を撃沈 最後に自ら戦艦に体当りして轟沈 一機三艦無類の大戦果を収め壮烈なる戦死を遂ぐ」とありましたが、『朝日新聞』

（昭和二十年二月十八日朝刊一面）「上陸企圖の敵軍を我軍直ちに撃退」の記事には、「敵の艦砲射撃は我方の陸戦陣地と高角砲陣地に向つて打つて来た。我方も直ちに砲門を開いてこれに応戦した、この時敵艦船に打向つたわが海鷲は戦列の中に突込むや、その中一機は瞬時敵巡洋艦の真上から突込んで果敢な自爆、敵巡洋艦は大火災を起こすと見るや忽ち轟沈してしまつた」とあります。情報が錯綜する戦場だった為か、聊か碑との食い違いが見られますが、この「二機」は齋藤清志命の搭乗された飛行機だったのでないでしょうか。

◎**戦没者叙勲**

戦後、成正氏は、「弟の死は決して無駄死にはない」という思いから、弟の慰霊顕彰に尽

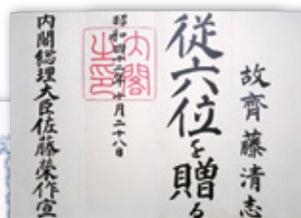
力されました。その努力が実り戦後二十二年時を経た昭和四十二年、時の首相佐藤栄作より齋藤清志命に従六位勲五等が贈られました。

今回、お忙しい中、齋藤侃夫氏にお話を聞かせていただきましたが、筆者の文章力不足・調査力不足なども相まって十分にお伝えすることが出来なかつた部分も多々あります。彼方此方で行われておりますが、今年は大東亜戦争終結七十年の節目です。この節目の年は、国民一同が英霊について深く考える機会となるはずですが、英霊の御事蹟に触れ、現在の価値観のみで判断せずに、自ら深く理解しようと努め、英霊を顕彰する場所へ赴き、当時の方のことを思われ、八月を迎えていただけばと思います。また、記事を読まれた方のご先祖様の中には、大東亜戦争に限らず、国家の為、家族の為に命を捧げられた方がいらつしやると思います。大東

亜戦争より昔の話となると、遺

品や当時の伝え聞いたお話し等、残っているものも少ないかもしれませんが、一度ご先祖の御事蹟を追われてみては如何でしょうか。

最後になりましたが、此度ご協力いただいた齋藤侃夫氏に此の場を借りて厚く御礼申し上げます。



位記



勲記

右の写真は、齋藤清志命の位記と勲記。戦没者叙勲により昭和四十二年、戦後二十二年の時を経て従六位勲五等に叙された。

鳳鳴クラブ（高瀬の雅楽団体）

鳳鳴クラブ元会長 田邊良三

私が雅楽を始めたのは、昭和二十一〜二十二年頃だと思えます。高瀬神社の本殿新築の為、仮殿に御神体をお遷しするとうことで、私は半ば命令的に、雅楽を習い、鳳鳴クラブへ入るよう、父より勧められました。一緒に始めたのは、笙の山田澄一・寺西外治・富賀見明、箏の山田一二・石岡武久・中田修幸・山田滋、龍笛の大野正夫・石川護・田邊良三の十名でした。先輩の方では、城端町北野の長谷川さん（龍笛）、同じく是安の前田さん（笙）が居られ、村の氏子では、森田正治さん（箏）、石川徳常さん（龍笛）、父の田邊勝二郎（龍笛・太鼓）が居られました。以前には、石岡覺兵衛さん（龍笛）や石岡篤次さん（箏）が居られた様で、それ以前には石岡長太郎さんも居られたようです。

私共龍笛の先生は、井波の南部さんと云う方でしたが、井波の竹部さん（寺方）に変わり、数年間習いに行きました。次に



鷹栖の原田先生（寺方）に神社で習いました。総合練習は、山田一二宅、森田正治宅、石川徳常宅、田邊勝二郎宅を持回りました。その後、大野正夫さんが辞められ、山田滋さんが亡くなられたので、新しく森田松夫さん（笙）、田邊義男さん、川嶋岩雄さん（龍笛）、中嶋紀光さん（箏）、中嶋光夫さん（笙）が入会されましたが、一〜二年で辞

める方、亡くられる方もあり、メンバーが固定せず、困りました。別の話ですが、石川護さんと私の二人は、神社の初詣に協力を要請され、神楽笛と太鼓を習いました。先生は神主の杉岡さんに手解きを受け、後日、笛は神社の神主になられた山田さんに習い直し、太鼓は名譽宮司藤井秀直さんに七五三方式の打ち方を習いました。高瀬の太鼓は他の神社と異なり「高瀬太鼓」と云う打方で、小バチが少ないのが特徴です。本殿が仮宮の年であったろうと思われます。新年の御祈禱中に猛吹雪となり私共の居る場所には勿論、御祈禱中の神主さんの処まで、お参りの人垣が押寄せ、神主さんの狩衣の袖が千切れ、私共の羽織も跡形も無くずたずたになってしまい、大変なことになりました。その頃は、私共も法衣や狩衣は持つて居らず、普通民家の礼装（紋付袴）でした。翌日は、祖父のものを借りて間に合わせました。この

結婚記念のご朱印

平成二十七年四月より、神前結婚式で結ばれたご夫婦に授与する、特別な「ご朱印帳」です。「夫婦相和」の誓いを胸に全国の神社をお参りして、大神様の御加護をいただかれるよう祈念して、ご朱印帳を授与しております。



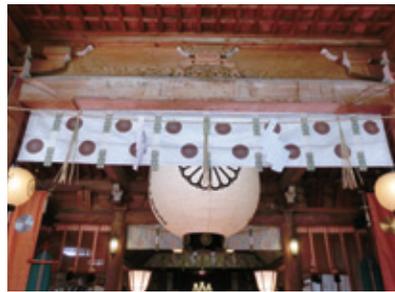
ご案内

奉納

○「門帳」

藤井 孝行殿

氏子
平成二十七年四月十日



○絵画「白菊の花香る」

富山市ひよどり南台

黄綬褒章・日展会友

津幡 光清殿

平成二十七年五月十七日

本年四月九日、パラオ共和国

ペリリュー島「西太平洋戦没者

の碑」と「米陸軍第八十一歩兵

師団慰霊碑」前にて、白菊の花

を手に深く拝礼された天皇皇后

両陛下。津幡さんご供花にな

られた「白菊の花」を描かれま

した。謹んで、当神社 功靈殿に奉納致しました。



○「参道玉砂利」

富山市八人町

株式会社 岡部

代表取締役 稲積

○「参道玉砂利舗設」

南砺市坪野

株式会社 藤井組

代表取締役 藤井

○「境内剪定作業」

小矢部市津沢

株式会社 越路ガーデン

代表取締役 西尾

平成二十七年六月八日

※恒例の奉仕作業ですが、

本年も爽やかな境内に

して頂きました。

○「シユレッター」

元事務員

安藤栄里子殿

平成二十七年六月二十二日

戌の日(安産祈願)

- 7月 9・21日
- 8月 2・14・26日
- 9月 7・19日
- 10月 1・13・25日
- 11月 6・18・30日
- 12月 12・24日

腹帯のお祓いも行いますのでご持参下さい。

辞令

出仕 魚岸 一弥
権禰宜に任ずる

平成二十七年四月三十日
神社本庁

安藤 栄里子

願により事務員を免ずる

平成二十七年六月二十一日

編集後記

当神社の南にある「南砺市埋蔵文化財センター」が、二年間の改装工事を経てリニューアルオープン致しました。

千二百年前の役所跡、国史跡「高瀬遺跡」より出土した木簡や墨書土器、和同開珎などが展示されています。皆様も往古の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

【表紙写真】

社標 (大正十四年八月建立)

発行日 平成二十七年七月一日

発行所 越中一宮 高瀬神社社務所

〒932-0252 富山県南砺市高瀬291

TEL(0763)8210933 FAX(0763)8213204

編集人 長谷川宏幸

印刷所 牧印刷株式会社

二人の誓いは家族の願い



この地で二千年の歴史をもつ越中一宮 高瀬神社は、
縁結びの神様 おおくにぬしのみこと 大国主命をまつる神社として多くの
神前挙式を執り行い、お二人の幸福を願ってきました。

たまぐしはいれい
～玉串拝礼～

新郎新婦が神前に進み、感謝と祈りを込めて
玉串を奉り、たてまつ 二拝二拍手一拝の作法で神前を
にはいにはくしゆいっばい
拝礼します。

縁結びの神様に誓う

伝統の結婚式を挙げていただく、
一生に一度の日だからこそ、
一日一組のカップルの為だけに、
このバンケットは生まれました。

一日一組限定の

おもてなしバンケットホール

このバンケットホールでのご結婚披露宴のご予約を承っております。
お気軽にお問い合わせ、ご相談いただけますよう、お待ちしております。

あなたの人生に、神社がある。 **越中一宮高瀬神社**

〒932-0252 富山県南砺市高瀬291
ご予約はTEL0763-82-1131

高瀬神社  検索

只今
ご予約
受付中